

神通川鉾毒事件

姿なき人止業殺人

加藤秀

発売 徳間書店
発行 現代史出版会

神通川鉆毒事件

次女なき人止業殺人

加藤秀

発売 徳間書
発行 現代史出版

【著者略歴】

かとう・しゅう

1925年、秋田県に生まれ、秋田師範卒業後、
教員、編集者を経て作家生活に入る。
主な著書は『みちのく風流滑稽譚』（三交社）
などのほかに、子供向けとして『ひきさかれた
大陸』（偕成社）、『少年恐龍館』（童心社）
がある。

姿なき企業殺人―神通川鉅毒事件―

昭和五十四年十二月二十日印刷

昭和五十四年十二月三十日発行

著者 加藤 秀

発行者 徳間 康快

発行所 現代史出版会

東京都港区新橋三―〇―九

第五兼坂ビル

〒105 電話四三―二―四九

本文・ミツワ印刷

オフセット・真生印刷

製本・ナショナル製本

発売 徳間書店

東京都港区新橋四―〇―一

〒105 電話四三―六―三三

振替東京四―四四三九二

©一九七九
検印廃止

北アルプスの焼岳に源を發し、絶壁の間を水量豊かに流れる神通川は、延長百二十キロ、流域面積二千二百二十平方キロ。

下流に肥沃な土地を抱えたこの川を、古来「神の通る川」として人々は崇めてきた。

目次

発端

7

宿命

12

水質調査

27

共同研究

31

微量金属

45

鉍毒説

50

農業被害

69

カドミウム

86

告 発

102

忍びよる手

121

対決

137

立ち上る人々

152

常任弁護団

169

公害病第一号

185

口頭弁論

193

証人と証言

203

判決

245

あとがき

260

カバー写真
装幀 川畑博昭
加藤広明

姿なき企業殺人——神通川鉋毒事件

発端

昭和三十年五月二日の午後三時頃、富山市東岩瀬海岸の浜茶屋で銚子を傾けている二人の男がいた。一人は富山県婦中町の開業医藤井豊、一人は越中新聞の社会部記者清田真一である。

見晴しのよい浜茶屋からゆったりとうねっている海が見えた。藤井は手に持った杯を一息に飲み干すと、

「海を眺めながら一杯やるのもいいもんですね。清田さんの家は海に近いから、夏なんかちょいちょい泳げるでしょう」

八十五キロの巨体から出るにしては、細く柔かい声である。

「それが滅多に泳がんですよ。年のせい妙に身体が疲れてましてね。休みの日はいつも家でごろ寝です。海も磯（いそ）くまりましたしね」

前頭部が禿げ上った清田は、四十三歳という年齢よりは老けて見える。

「そういえば僕もびっくりしましたよ。前は青く澄んでいましたがね。何時ごろからですか、こんなに穢（し）れてきたのは」

「岩瀬浜に工場ができてからです。工場側では浄化処理をしていると言いますが、やはり廃水が流れてくるんじゃないですか」

「大畑知事の工場誘致政策も結構ですが、環境保全のほうもしっかりやってもらわないと困りますね」

「そうなんです。大畑知事は北陸第一の工業県にするとかいって、すでに東洋製鋼、北越化学、日本パルプの誘致に成功したわけですが、産業廃棄物の規制はあまりやっていないようですな。規制を強めれば誘致がむずかしくなることはわかるんですが、いちど破壊された環境は元に戻りませんからね。来年はさらに共和製紙の工場もできるそうですから、岩瀬浜の海水浴場も、そのうち駄

目になってしまふんじゃないですか。もっとも前から騒がれていた水質保全法さえ、まだ国会を通らない状態ですから、県が呑気に構えているのも当然ですがね」

清田は社会部で公衆衛生関係の仕事を担当しているだけあって、話が具体的である。

公衆衛生といえは、藤井が清田と知り合ったのは、県の医師会のとときだった。その頃、藤井は富山県医師会の広報部長をつとめていて、富山市の医師会館で開かれる会合には毎回出席したが、清田も必ず顔を見せた。医療関係のニュースを取材していくのである。名刺には越中新聞社、社会部と刷り込んであったが、風采のあがらない中年男で、動作ものっそりしている。

（あれで新聞記者がつとまるのか）

というのが藤井の偽らざる印象であった。

しかし、何回か話し合ううちに古風な義理堅さと挺子でも動かない頑固さの持主であることが判った。表面は如才なく振舞いながら、利害と名譽に敏感な医師仲間には滅多に見かけない存在である。清田と話していると心が安まるのは、無防備に自分をさらけ出せる安心感のせいかもしれない、と藤井は思った。

そんなわけで藤井は広報部長をやめてからも、機会あるごとに清田へ電話した。今日も用事があって富山市へ出たついでに、清田の家まで足をのばしたのである。

清田は他の記者のように話題を漁ろうとするような態度は見せない。いつものんびりと世間話をする。そういう清田を見てみると、不思議にこちらからネタになりそうな話を提供しなくなってくる。

ひとしきり風が渡った。藤井は眼鏡ごしに目を細めて海を見た。波打際あたりがかなり汚れているばかりでなく、左手の河口付近は遙か沖合いまで帯状の白い流れが伸びている。それが工場排水なのか、上流からの濁りが溜ったものか、藤井にはわからない。わからないだけに、海や川が音もなく汚染されていくことに対する苛立ちのようなものが藤井の心を襲う。

「清田さん、いままで黙っていましたけど、私の住んでいる婦中町に不思議な病気がありましてねえ」

「不思議な病気？　どんな病気ですか」

清田は世間並みの好奇心を示す口調で聞き返したが、目の奥には新聞記者の鋭い光が隠されていた。

「それが悲惨というか、目をおおいたくなるような病気

なんです。患者はほとんど中年を過ぎた女性ですが、全身何か所となく骨折し、痛い痛いと言ひながら死んでいく……」

「初耳です。藤井さん、もう少し詳しく話してください。原因は何ですか。患者は何人ぐらいいるんですか」

清田は思わず新聞記者の本性をあらわした。特ダネであることに間違いない。朝刊の最終締切は午後七時、他社に嗅ぎつけられるまえにまとめなければ……。清田はじっとしていられなかった。藤井は微笑して、

「清田さん、大丈夫ですよ。ほかの新聞社には何処にも話していませんから。私もあなたに打ち明けた以上、できるだけ正確な記事が報道されるよう協力しますよ。明日午後二時頃病院へ来てください。患者の家へ案内しましょう」

清田は翌日、約束時間かきぎりに藤井病院を訪ねた。広い敷地の左側に医局らしいモルタル造りの建物があり、左側に木造二階建の病棟がある。正面突き当りに住居の玄関が見える。

車の音を聞きつけたのか藤井が玄関から顔をみせた。白衣を着て往診の仕度をしている。

「それじゃ、出かけましょうか」

運転手がエンジンを噴かしている藤井の車に乗り換え、患者の家へ向った。

患者の家は藤井病院から一キロと離れていない農家だった。向って左側に馬小屋があり、馬小屋に続く広い土間は作業場兼農作物の倉庫になっている。

土間から入ると十畳敷ほどの板の間があり、そこが居間なのだが、この地方の農家は盆と正月以外は畳をあげておく。

居間のつぎが十畳の仏間で座敷を兼ねている。座敷の裏に六畳の部屋と納戸がある。納戸は薄暗くじめじめしていて、足を踏み入れるとふんと微臭い臭いがする。そこに病気の老婆がうずくまるように寝ていた。一見七十近くに見えるが、まだ六十一歳だという。

患者は薄めの蒲団をかけていたけれども、腹のあたりが高く盛り上っている。蒲団の重みで骨が折れるおそれがあるので、炬燵のやぐらの上に蒲団をかけてあるのだ。病院で使う離被架の代用である。

診察のために藤井が蒲団をめくると患者の瘦せ衰えた体が見えた。胸も手足も肉がそげ落ち、まるで骸骨のようである。

「ア、イタタタ……」

とつぜん悲鳴が起った。藤井が鶏の足のような患者の手を持ち上げて脈をとろうとしたのだ。皺だらけの顔が歪み、歯をくいしばって閉じた目から涙が滲みだす。

藤井はいたわるように両腕や両足をさすってやり、それから骨だらけの腕に静脈注射を打った。その間じゅう患者はひいひい泣き続ける。その声も見知らぬ清田のてまえをはばかり、必死に抑えつけているようだ。

やがて注射が効いてきたのか、泣き声がやみ、ようやく元の顔を取り戻す。

「先生、頼みます。痛いがですちや。なんだしておらあだけ、こんな業病になるのけ。神はんも仏はんもおられんがけ。おらあ一晚じゅう痛うて泣いておるがですちや。先生、頼みます。治らんかったら、いっそのこと死なしてくたはれ」

見ると病人は亡者のように胸に手を組み合わせている。

「そのうち治るから、もう少し我慢しなさい」

そういつて藤井が帰ろうとすると、

「先生、頼みます。薬でも注射でも、どんどん打って、はやく治してくたはれ。とても、我慢できんがいね」

追いつがるように訴える。患者は胸に二か所、腕に三か所、足に五か所、骨折しているのだった。

病室を出て居間を横切り、土間へ降りると、留守番をしていた嫁が外まで送ってきた。車の傍まできて、

「ご苦労さまです」

と頭を下げ、

「先生、おばばは、まだ何年、痛い痛い言わんにゃならんがけ」

言い悪そうにきく。

「何年といっても……」

藤井は言い淀んでしまう。答えることができないのだ。そのまま、開かれている車のドアに向ってむつりと足を運ぶ。

清田のうしろで嫁の独り言がきこえた。

「他人はんはんに恥しい業病にかかって、ほんまに因果なことですちや」

車が動きだすと、藤井は解放されたように口を開いた。

「清田さん、あのような患者がこの地区に多いんですよ。土地の人は薬病だと諦めているようですが、必ず原因があるはずですよ。いろいろ治療を試みたんですが、いっこうに効を奏しません。それで困ってるんです」

「驚きましたね。あんな病気があるなんて。まさに生き地獄ですな。とにかく一刻も早く報道しましょう」

清田の目にいま見てきたばかりの患者の姿が焼きついてた。痛い痛いという悲鳴が耳の底にこびりついて離れない。胸を締めつけられるような叫びであった。

「ところで藤井さん、病名はどうしましょうか」

清田は見出し文句をあれこれ考えながら聞いた。

「病院では『イタイイタイさん』と呼んでいますが、もちろん正式の病名ではありません。医学辞典にも載っていない奇病ですからね」

「藤井氏病というのは、どうですか」

「それは困ります。まだ、医学界に発表したわけではありませんから。私の推測では多くの学者たちの手を借りなければ、正体を突き止めることができないと思います」

よ」

「では、『イタイイタイ病』というのはどうです？ そのもののズバリに」

「新聞記事としてなら別に差支えないでしょうね」

翌日の五月四日、越中新聞の朝刊を開いた人々は思わず目を見張った。社会面のトップに

「婦中町熊野地区の奇病」

「イタイイタイ病と取組む藤井博士」

「全身が骨折で痛み、身長が二十センチも縮む」

「被害者百人余、大部分が中年を過ぎた女」

と、五段抜きの見出しで大きく報道されていたのである。

患者の家では呪われた病気がイタイイタイ病という名前であることを知らされ、病名にいささか揶揄的な響きを感じて顔を見合わせたが、大部分の人々は恰好な話題の一つとして、この珍奇な病気を取り上げたにすぎない。

宿 命

藤井病院は婦中町萩島にある。富山市の中心から南西へ八キロ、車で二十分とからない。

この地域は神通川の両岸にひらけた扇状地のどまん中にある。土地が川の流れよりも高く、昔は荒れ野であった。徳川時代の初め、牛ヶ首用水を作って上流から水を引き、大正十三年には大沢野用水を完成させた。いまでは富山県の穀倉地帯となっている。夏はいちめんの青田がひろがり、秋は黄金の波が揺れ動く。水量ゆたかな神通川から、たっぷり水が引かれるからだ。

田圃の中に点在する農家は、みな堂々とした構えで高い杉木立に囲まれている。農村としては豊かなほうで二

ヘクタール以上を耕す農家が多い。

藤井家は歴史が古く、初代は富山藩前田侯の典医であった。豊の父、藤井直樹は元陸軍軍医大佐で宮家の主治医をつとめたことがある。退役後、郷里に帰って藤井病院を開業した。藩制時代からの大地主で二百余の小作人を抱えていた。

直樹の長男として父の軍職中、長崎で生まれた豊は、小、中学校時代は富山の郷里で過ごし、家業を継ぐため金沢の北越大学医学部に入学した。昭和十五年医学部を卒業後も友永教授の第一病理学教室に残って病理学を専攻した。テーマは主として心臓奇型病理であったが、研究半ばにして日華事変が始まり、まもなく出征。北支の野戦病院で七年間、傷病兵の治療に明け暮れた。

藤井豊が敗戦で陸軍軍医大尉の肩章を剥ぎ取られて中国から郷里へ復員して来たのは昭和二十二年三月である。

八年ぶりで眺める山河は昔と変らなかったが、富山駅へ降りると、かつての町並みは跡方もなかった。空襲の生々しい焼跡にブラックが乱雑に立ち並んでいる。行き交う人々の服装も貧相で、みな疲れ切った顔をしてい

た。

藤井は家族の安否を気遣いながら道を急いだ。町外れの有沢橋にさしかかると、東南はるかに北アルプスの銀嶺がくっきり見えた。橋を渡って堤防へ登る。堤防を渡ったほうが近道なのだ。春先の神通川は雪解けの濁りを見せている。これから一日毎に水量が増え、雪国の春は一斉に花の季節を迎えるだろう。

生家は八年前の形をそのまま止めていた。しかし、家の中はすっかり模様が変わっていた。父は四年前に死亡し、多額の相続税に加えて耕地のほとんどが農地改革で取り上げられてしまったという。病院は閉されたままで老母と二人の妹はやつとその日その日を凌ぐありさまだった。

藤井は内地へ帰ったら、もう一度大学の研究室へ戻って病理学の研究を続けるつもりだったが、そんな我儘は許されなかった。生活のために早速病院を開き、開業医の仕事を始めなければならぬ。戦地の疲れを休める暇はなかった。患者のほうも藤井が帰ったことを聞きつけて続々とつめかけてくる。

藤井は白衣をつけ、父が使っていた診察室に入った。

診察を始めて驚いたのは患者の大半が中年を過ぎた女性で、口をそろえたように体のあちこちが痛いと訴えるのだ。神経痛に似ているが、戦地で治療した兵士の神経痛とは様子が違う。顔色が黒ずんでいるだけでなく、全身の皮膚が何処となく黒光りする。体が衰弱しているわりには目の輝きが鋭い。歯はほとんど抜け落ちて総入れ歯の者が多いが、顎の骨が変形しているので噛み合わせが悪く、モガモガしている。胸は痩せて肋骨がとび出し、腹は深く落ち窪んでいる。胸部に聴診器を当ててみても特に異状は認められない。腹部も触診上の所見はこれと違って取り上げる程のものはない。脈をとろうとして腕を持つと、持ったところで或る患者はボキリと折れた。とたんにそれまで澄んでいた目に苦痛の色が走る。

「あ、イタイッ。先生、痛いです」

患者は軽いうちは歩いて通院する。歩けなくなると家族におぶさったり、リヤカーに乗せられたりして運ばれてくる。重症になると痛がって動かすことができないので往診を求める。

往診した患者のなかには大腿骨の骨折で足が外へ折れ曲った者もいた。下肢がいたるところで折れて蛸たこの足の

ようにグニャグニャになった者もいた。そうかと思うと昼のへりに躓いたひょうしに足指の骨が何か所か折れてしまったという患者もいた。

骨折が起るとその部分を綿で包み、粗雑な添え木を当てて間に合わせている。そういう患者は歩くことはもちろん、簡単な坐業さえ出来ない。蒲団の上に寝ているだけである。寝るにしても仰向けになることが出来ず、横になってエビのように体をまげている。まるで僂僂むしが寝ているようだ。現に患者の多くは背丈が低くなり、なかには身長が三十センチも縮んだという話もきいた。骨が細るだけでなく短縮してしまうのだ。

重症患者は笑ったりクシャミをしたりしても痛いと言え。呼吸するだけでも痛いという患者もいた。そういう患者は蒲団に横たわっていることさえ苦痛らしく、下肢を炬燵たうちのやぐらに吊して体重を軽減させている。

寝たきりにしては瘡瘡じよくず（床ずれ）が少ない。体重が軽くなるからだらう。爪は貧血で青黒く変色し、鳥の爪のように伸びている。自分では髪の手入れが出来ないので、男のように短くするか、あるいは、ぼうぼうに振りかぶっている。まさに幽鬼のようだ。家族は初めのうちは世

話をやくが、手の施しようがなくなると、人目につかないところに押し込めて、あまり面倒をみなくなる。

末期になると激しい痛みのために夜昼となく泣きわめき、睡眠不足、疲労、食欲不振などが重なって痩せ衰えて死んでいく。地獄の責苦とはこのことだろう、と藤井は目をそむけたくなる。

それにしても、ほとんど、女性だけが冒されるのはなぜか？ 若い藤井は多発性の不思議な病気の源泉を一刻も早く突き止めてみようという意欲が湧きあがった。しかし、藤井病院は大学の研究室とちがって、ろくな設備がない。田舎の開業医の役目は、まずもって患者の苦痛を和らげ、少しでも病状を軽くしてやることではないか。

さしあたって藤井は神経痛とリウマチを想定して治療を始めた。幸い神経痛とリウマチの治療の経験は積んでいる。藤井が七年間滞在した北支の駐屯地は、太平洋戦争の兵站基地であった。ニューギニア、フィリピンなどの南方で兵員が消耗されると、北支から精兵をすぐって補充する。その埋合わせは現地の居留民や内地の予備兵を召集してこれに当てる。そんなわけで北支は老兵だけ